

1 受付待ち，収骨待ちについて

(1) 受付待ちの状況

下表は，火葬件数の多い時期である1月分(①)と火葬件数の少ない時期である6月分(①：『概要説明資料』(28頁～))のデータを用い，中央斎場受付時にすぐに告別ホールに案内できなかった件数(②)，受付から告別ホールを指示するまでに5分以上要した件数(③)，及びその日の最高の待ち時間(④)を試算したものである。

この数値が，いわゆる告別ホール待ちの状況を示している。

平成24年1月				
	火葬件数 ①	受付時間待ち の発生件数②	5分以上待ち の発生件数③	最高の待 ち時間④
1	元 日			
2	休 場 日			
3	84	30	16	10
4	69	10	0	4
5	58	5	0	4
6	65	16	11	19
7	65	16	11	10
8	18	1	1	9
9	74	34	14	10
10	48	8	6	6
11	45	0	0	0
12	49	2	1	5
13	71	20	9	10
14	休 場 日			
15	63	18	15	10
16	62	17	2	7
17	59	18	5	7
18	53	12	8	9
19	83	41	20	12
20	16	1	0	4
21	76	25	17	14
22	53	6	1	6
23	58	7	3	10
24	休 場 日			
25	83	51	35	17
26	51	10	6	13
27	42	3	0	3
28	45	0	0	0
29	60	12	6	8
30	13	0	0	0
31	77	34	21	17
合計	1540	397	208	
平均	57	14.7	7.7	
%		25.8	13.5	

平成24年6月				
	火葬件数 ①	受付時間待ち の発生件数②	5分以上待ち の発生件数③	最高の待 ち時間④
1	63	18	9	9
2	37	10	6	9
3	43	5	0	4
4	40	2	0	3
5	56	18	8	11
6	休 場 日			
7	58	17	14	16
8	32	0	0	0
9	40	0	0	0
10	35	3	0	4
11	47	10	1	7
12	13	1	1	7
13	52	15	3	11
14	42	8	3	7
15	44	13	3	8
16	45	6	2	15
17	52	3	1	5
18	休 場 日			
19	68	22	13	10
20	39	1	0	4
21	45	9	8	14
22	44	9	0	4
23	11	1	0	1
24	54	11	5	7
25	46	7	1	5
26	33	2	0	3
27	45	10	3	7
28	35	1	0	4
29	休 場 日			
30	61	18	11	15
合計	1180	220	92	
平均	43.7	8.1	3.4	
%		18.6	0.8	

注1 件数は大人の火葬件数

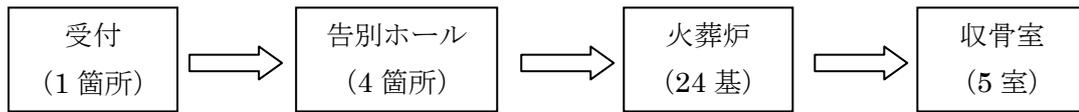
注2 休場日以外で網掛けしている日は友引日

注3 最下欄の%欄は月合計に占める割合

注4 ④欄の枠囲みはその月の最高時間

(2) 収骨待ちのシミュレーション

中央斎場は告別ホール4室、火葬炉24基、収骨室5室を備えていることから、順調に火葬が進めば、収骨待ちは発生しないのではないかと考えられがちである。



しかし、① 受付が集中する時間帯があること、② 通常、告別ホールでの所要時間よりも収骨時間の方が長いこと、③ 遺体によって火葬時間が異なることから、火葬済みの焼骨が収骨室の処理能力以上に集中し、収骨待ちとなる場合がある。

事実、24基の火葬炉から5室の収骨室への集中が頻繁に起こっており、この収骨待ちが一連の火葬業務の中で最もボトルネックとなっているとの問題がある。

しかし、収骨時間や収骨待ちの実状を数値として統計処理はしていないため、火葬時間を基に収骨待ちが発生する仕組みのシミュレーションを試みた。

シミュレーションでは、(1)の受付待ち状況と同じく、火葬件数の多い時期である冬場の1月と比較的火葬件数の少ない夏場の6月のいずれも休場日明けで火葬件数が多い1月3日と6月1日のデータを用いた。

これまで、火葬件数の多い日の収骨待ちが、20分～30分で10回程度発生している実状から、収骨の平均時間を試算すると下表のとおり、平均の収骨時間が19分～20分であることが判明した。

	1月3日(火)			6月1日(金)		
開場日の状況	正月休み(1月1,2日)明け			休場日明け		
季節的傾向	火葬件数が多い (1,2月平均57件)			火葬件数は少ない (6,7月平均44件)		
火葬件数	84件			63件		
収骨室待ち						
収骨時間	18分	19分	20分	18分	19分	20分
～9分	33件	28件	19件	8件	13件	8件
～19分	17件	27件	28件	11件	10件	11件
～29分	0件	7件	16件	6件	6件	10件
30分～	0件	0件	1件	0件	1件	3件
最高時間	19分	27分	35分	27分	31分	35分
連続時間	1H49M	3H3M	3H16M	1H20M	1H33M	1H58M

図1(1月)と図2(6月)がシミュレーションをまとめたものであるが、これにより以下のことが判明した。

- ① 1月と6月ともに、火葬が集中する時間に収骨待ちは発生していること。
- ② 1月は火葬件数が多く、1日を通じて収骨待ちが頻発していること。
- ③ 6月は通常の花葬が集中する時間帯である正午前後から混雑が起こっていること。

(3) 将来の収骨室の必要数（『京都市中央斎場における将来火葬需要予測調査』から）

平成 20 年に実施した(株)地域計画建築研究所（アルパック）の『京都市中央斎場における将来火葬需要予測調査』では、来るべき火葬件数のピーク時には、現状の施設や業務内容では相当数の収骨室を増設しなければならないと指摘されているが、受付時間の延長などの工夫によって現在の 5 室から 2 室増設した 7 室の収骨室により対応が可能と結論づけている。

<京都市中央斎場における将来火葬需要予測調査のうち収骨室に関する調査結果概要>

ア 現況施設の許容能力

現在、京都市中央斎場には 5 室の収骨室があるが、火葬炉の数と能力に比較して少なめであり、集中時には、火葬が終了しても収骨室が全室稼働して空いていないといった状況が現実には起こっている。

施設の許容能力（予想のベース）

	数量	所要時間	最大回転数	稼働時間	許容件数
収骨室	5 室	20 分/件	18 回転	6 時間	90 件

イ 将来の施設対応状況

現状の稼働状況を前提とした場合、平成 23 年頃から収骨室の許容能力を超える日が年 4 日程度発生するようになり、対処するためには収骨室 1 室の増設が必要である。また、最も火葬件数が多くなる平成 43～52 年には、許容能力を超える日が年に 60 日程度発生する可能性があり、対処するためには収骨室 3 室の増設(①)が必要だが、受付時間を 1 時間延長することにより、2 室の増設(②)で対応が可能となる。

① 年間火葬件数推計

平成	23～27	28～32	33～37	38～42	43～47	48～52	53～57	58～62
1 日最大件数	102.0	114.0	125.0	133.0	138.0	137.0	132.0	127.0
許容能力を超える日数	4	20	40	54	59	58	53	46
必要収骨室数	6	7	7	8	8	8	8	8

② 年間火葬件数推計（1 時間延長の場合）

平成	23～27	28～32	33～37	38～42	43～47	48～52	53～57	58～62
1 日最大件数	102.0	114.0	125.0	133.0	138.0	137.0	132.0	127.0
許容能力を超える日数	0	2	10	20	30	27	19	12
必要収骨室数	5	6	6	7	7	7	7	7

火葬件数のピーク

現在の収骨室数では対応できない日数が 30 日発生する

ウ 火葬件数の推移予測（単位：件）

表中の「火葬能力」は120件/日

平成	年間平均 火葬件数	一日最大 火葬件数	火葬能力を 超える日数(日)
28～32	18,600	114	0
33～37	20,450	125	1
38～42	21,750	133	3
43～47	22,520	138	4
48～52	22,390	137	4
53～57	21,570	132	2
58～62	20,730	127	1

『概要説明資料』（56頁）

火葬件数のピーク

現在の火葬炉数では対応できない日数が4日発生する